平出丸山遺跡 II

2009 長野県辰野町教育委員会

RUYAMA II

平出丸山遺跡 II

―平出保育園下水道敷設に伴う発掘調査報告書―

2009

長野県辰野町教育委員会

HIRAIDE-MARUYAMA II

序

平出丸山遺跡は昭和57年に平出保育園の建て替え工事の際に調査が行われ、縄文時代後期の石棺墓が５基出土したのをはじめ、縄文時代早期の押型文土器等がみつかっています。

この遺跡の調査は辰野町教育委員会として行ったはじめての調査でした。その後、多くの開発行為が計画されて大規模な調査が行われた時期を経て、再び平出丸山遺跡の調査が行われるという巡り合わせの不可思議さを感じます。

今回は下水道の埋設事業として、ごく限られた地点での調査となりましたが、そこには保育園建設の歴史を垣間見ることができました。

調査成果は多くありませんでしたが、将来平出丸山遺跡の調査が行われる際の参考資料として活用されることを祈念します。

辰野町教育委員会
教育長 古村　仁士

例　　言

1. この報告書は平出保育園下水道敷設事業に先立って行われた長野県上伊那郡辰野町大字平出2784番地に所在する平出丸山遺跡（ひらいでまるやまいせき）の第２次発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は辰野町教育委員会文化係が辰野町教育委員会こども係の依頼によって実施した。なお、発掘調査の組織については発掘調査関係者名簿として別掲した。
3. 発掘調査は平成21（2009）年10月７日から10月15日まで行い、その後立会い調査を10月19日から11月12日まで実施した。
4. 発掘現場における記録は福島永が担当し、遺構等の実測図の作成は板倉裕子、大森淑子、早川裕美子が行い、遺物の洗浄および台帳作成は村上茂子が行った。また、実測図および版下図の作成は佐藤直子、竹内みどり、福島が行った。
5. 調査時および整理時に作成した実測図および写真は、辰野町教育委員会で保管している。

発掘調査関係者名簿

調査主体者	古村　仁士（辰野町教育委員会教育長）
事務局	林　一昭（辰野町教育委員会教育次長）
	矢島　岡衛（辰野町教育委員会教育次長補佐）
	小澤　靖一（辰野町教育委員会文化係長）
	福島　永（辰野町教育委員会文化係）発掘担当者
発掘調査協力者	板倉　裕子、大森　淑子、高木　四郎、早川裕美子、宮原　栄治
整理作業協力者	板倉　裕子、佐藤　直子、竹内みどり、村上　茂子

目　　次

序
例　　言

第Ⅰ章　遺跡の位置と環境……1
第Ⅱ章　調査の経緯と経過……7
第Ⅲ章　発掘調査……7
第Ⅳ章　遺構と遺物……10
第Ⅴ章　まとめ……11

写真図版

報告書抄録

挿図目次

第1図　平出丸山遺跡位置図……2
第2図　周辺遺跡分布図……4
第3図　調査地点位置図……5
第4図　水道敷設ルートおよび調査方法区分図……6
第5図　平出丸山遺跡第2次調査全体測量図……8
第6図　調査区土層断面図……9
第7図　土坑実測図……10
第8図　出土遺物実測図……11

写真図版目次

図版1　調査前風景
図版2　調査前状況／調査区全景
図版3　南北方向調査状況／東西方向調査状況／土坑／出土遺物
図版4　ルートA立会い調査状況
図版5　ルートB立会い調査状況
図版6　ルートC立会い調査状況(1)
図版7　ルートC立会い調査状況(2)

第Ⅰ章　遺跡の位置と環境

1. 位置と付近の地形・地質

(1) 地　　形

辰野町は、南北約70kmの伊那谷の北端部、長野県のほぼ中央部に位置する。また、西を木曽山脈の最北部にあたる経ヶ岳（標高2,296.3m）より連なる標高1,100m以上の６つの山塊が占め、東には伊那山脈の北端部が延びている。伊那山脈は天竜川の支流の一つである沢底川を境として南部は標高700～1,200mの小式部城山塊、北部は標高800～1,000mの東山丘陵に二分されており、辰野町で最もなだらかな丘陵状の山地となっている。

一方、諏訪湖に源を発する天竜川は、数段の断層崖に挟まれて、その最低部を南流しており、平出地籍には２～３段の段丘が形成されている。なお、第一段丘面の平出丸山地籍では、昭和38年７月に中期テフラの第３浮石層直下から、長野県天然記念物の原牛の臼歯12枚が発見されている。段丘の山麓部には扇状地の発達が顕著であり、特に檜沢山～桑沢山麓では複合扇状地が形成されている。しかし、東部地区では概して扇状地の発達は少なく、真金寺付近に小規模な複合扇状地が形成されているにすぎない。東部地区で一番大きな扇状地は上野川によって形成されており、平出上町から下町までをその範囲としているが、これらの扇状地は、上層にテフラが厚く堆積していることから形成された時期も古い。

また、更新世後期末の台地の急激な上昇によって山地と平地の高度差が増大し、支流の勾配がきつくなり、上野川でも扇状地を深く開析して、扇状地面を段丘化するようになった。また、上野川沿いには幅100m前後の谷底平野が発達し、現在そのほとんどが水田として利用されている。

なお、平出丸山遺跡は上野川右岸の、東に延びる残丘状の台地に位置している。

(2) 地　　質

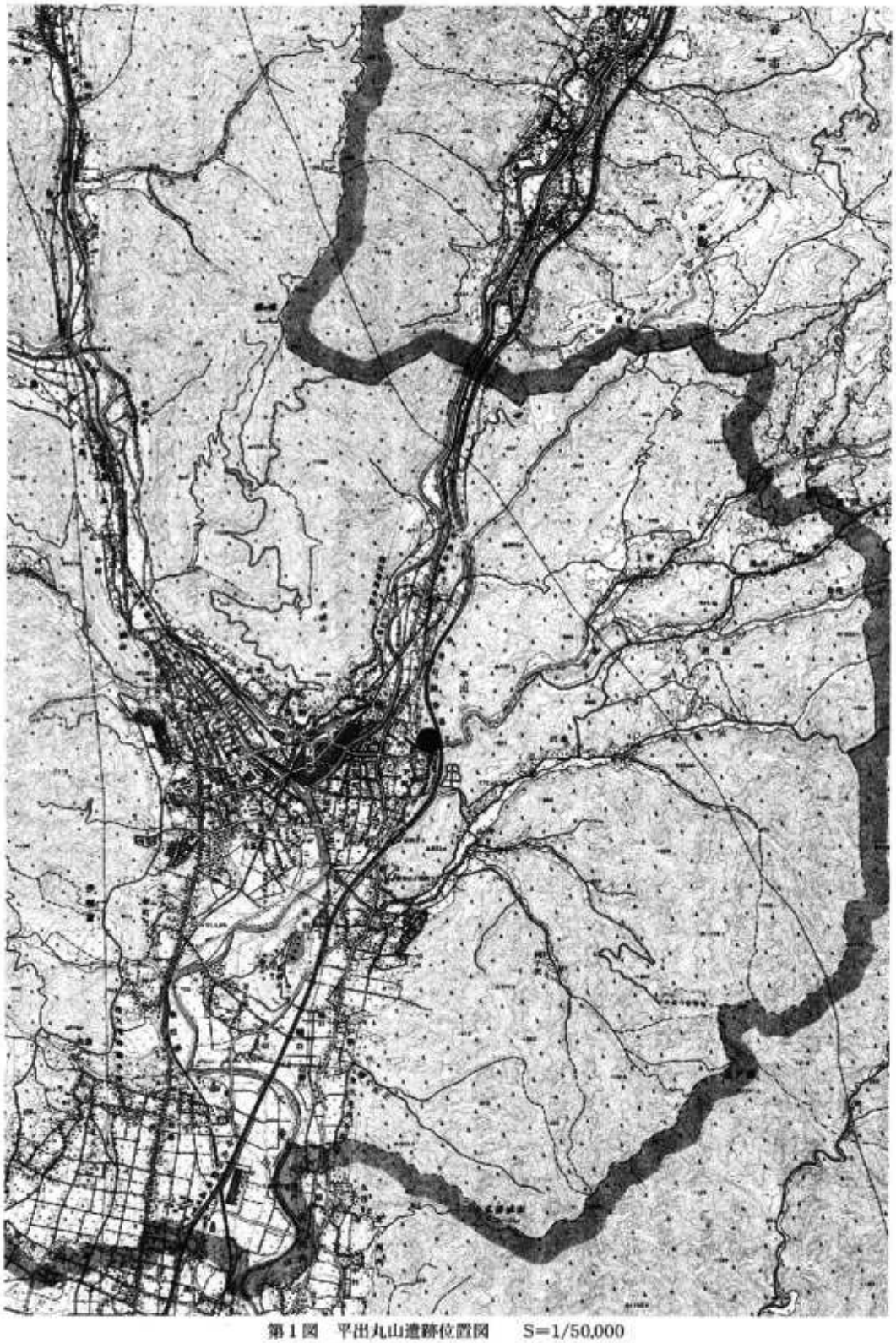
長野県はその中央部に日本を代表する大断層である糸魚川－静岡構造線がはしり、その東部にフォッサマグナが存在している。また、南部には中央構造線が東西に縦走し、地質学的には非常に複雑な構造を呈している。辰野町はこれらの構造線に近い地点に位置し、地質的には西南日本内帯の東端部にあたる。このため、赤石山脈は辰野町南部で途切れ、木曽山脈の花崗岩についても辰野付近で途切れている。

辰野地域は大陸縁辺部で形成された堆積岩を基層とし、東部地域ではその上部に沢底層と呼ばれる領家帯がのり、その後に、赤羽層や、塩嶺累層といった砂礫層や、火山泥流堆積物が堆積している。さらに、それを諏訪湖ができる以前に諏訪地方の山々から流入してきた、平出層といわれる礫層がおおっている。

東山丘陵は、山地を作る塩嶺累層と、それらを削って形成された谷底平野に堆積したはんらん原堆積物によって構成されている。

また、伊那谷西部や東部の山麓には大きな断層が走っており、特に西部の断層は「伊那谷断層群」と呼ばれ、数多くの断層崖、ケルンコル、ケルンバットが存在している。また、東部山地の真金寺北の林道では、山道に入って間もないところに約30mのうちに３本の大きな断層が存在している。

なお、横川川や、小横川川は、奈良井川と同様に北に向かって流れる川であったものが、断層が動いたために南流するようになった様子が伺える。このため、権兵衛峠－経ヶ岳－牛首峠の連なりが南北分水界となり、これより北部は千曲川水系として日本海へと流れ込み、南部は天竜川水系として太平洋へと注ぎ込んでいる。



第1図　平出丸山遺跡位置図　　S=1/50,000

2. 歴史的環境

平出丸山遺跡（150）は、昭和57年から昭和58年にかけて保育所の改築工事に伴って発掘調査が実施され、縄文時代後期加曽利B式を中心とした石棺墓５基をはじめ、早期の押型文土器や条痕文土器が出土している。なお、石棺墓の上部からは大規模な集石が出土している。この遺跡の上野川の対岸に位置する越道遺跡（139）は諏訪神社上社の外県神使廻湛神事の際に通ったと考えられる有賀峠の辰野側の上り口部分に位置し、中央自動車道の建設に先立って行われた試掘調査の折にも、直径4.5cmの石製円盤が出土しており、平成19（2007）年に実施された調査では、縄文時代後期（堀ノ内～加曽利B式期）の配石遺構や土器が出土したのをはじめ、縄文時代前期（諸磯a～b式期）の住居址や土坑が出土した。また、隣接する原田遺跡（135）からは早期の押型文土器が採取されている。

大石平遺跡（154）は上野川が平出の扇状地を流れ出る手前、越道遺跡の東に存在する越道山山頂にあり、中期初頭の土器が多量に出土しているが、地形的に不安定な場所であったため、遺構を明確に確認することができなかった。

また、辰野東小学校の校舎改築に伴って調査が実施された半平蔵遺跡では、古墳時代の祭祀跡をはじめ、白玉を伴う住居址や、金環が出土している住居址等合わせて26基をこえる竪穴住居址が出土している。この地域は『延喜式』に記載されている御牧のひとつである「平井手牧」の推定地域であり、奈良時代から平安時代にかけての住居址が17基と、掘立柱建物址10基以上が出土していることと、付近に群集墳の中で唯一残された御陵ヶ塚古墳や、石室の一部が残存している御社宮司古墳の存在していることから、牧との関係を考えていかなくてはならない遺跡である。なお、この遺跡からは弥生時代後期の住居址をはじめ、弥生土器を伴う竪穴なども出土している。

神送り遺跡は半平蔵遺跡の南に位置し、昭和48年に中央自動車道の建設に伴い調査が実施され、その後、県道改良事業等で本調査、試掘調査が行われている。その結果、平安時代の住居址が５基検出されており、これらの遺構からは灰釉陶器が出土していないことから、平安時代前期末頃の集落址であることが判明した。

この他、中央自動車道の建設に伴って調査された遺跡としては、以下の８遺跡がある。

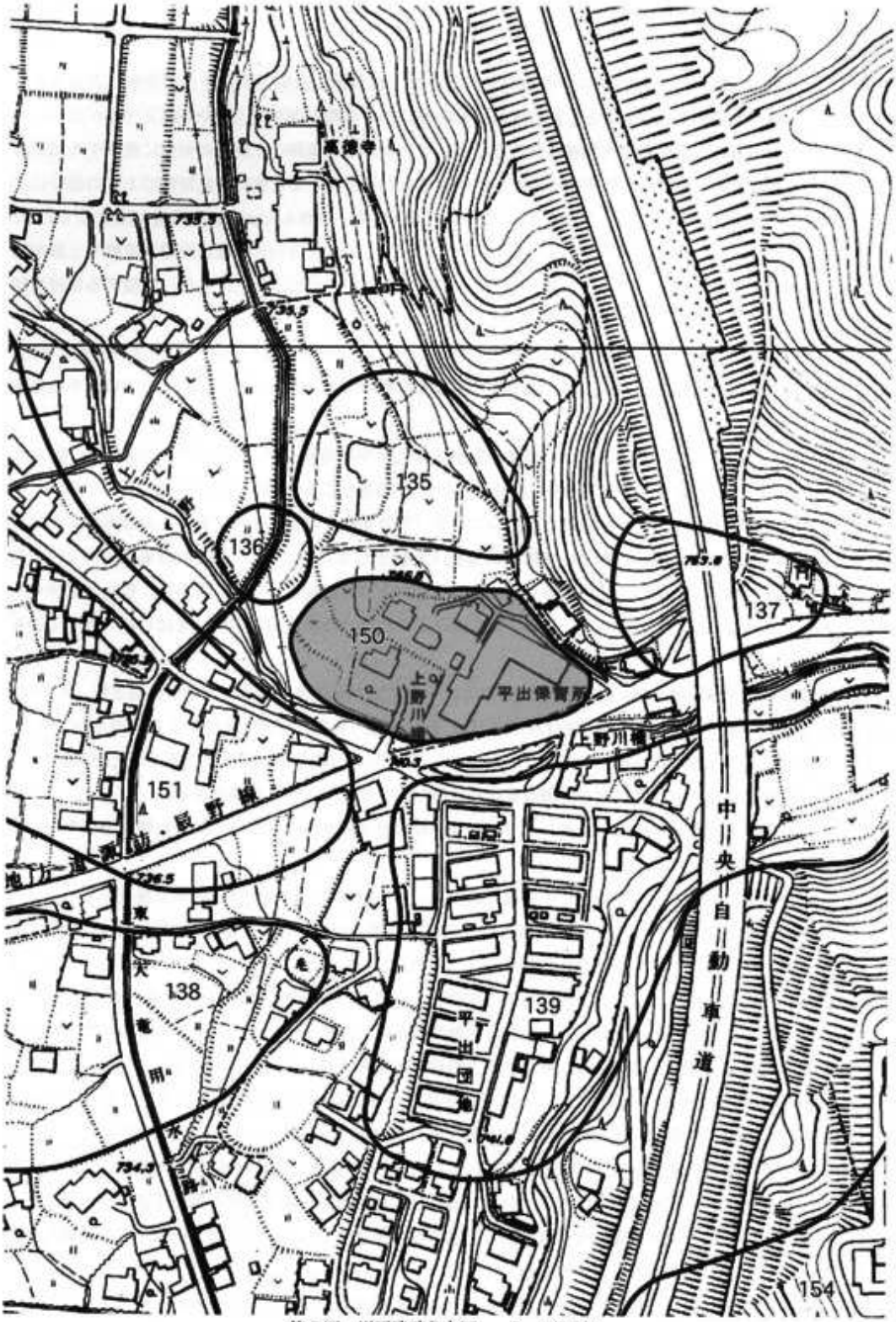
牧垣外遺跡は半平蔵遺跡の東部に位置し、平安時代の住居址１基が出土している。また縄文時代中期から後期の土器片も出土している。

堂ヶ丸遺跡は上平出の「井出の清水」の南麓にあたり、この遺跡からは縄文時代前期末葉を中心とした遺物を出土した住居址２基と、土坑８基が発見され、中世では礫で囲まれたり、敷かれたりした墓壙内から、骨片をはじめ、角釘等が出土している墓地が31基出土した。

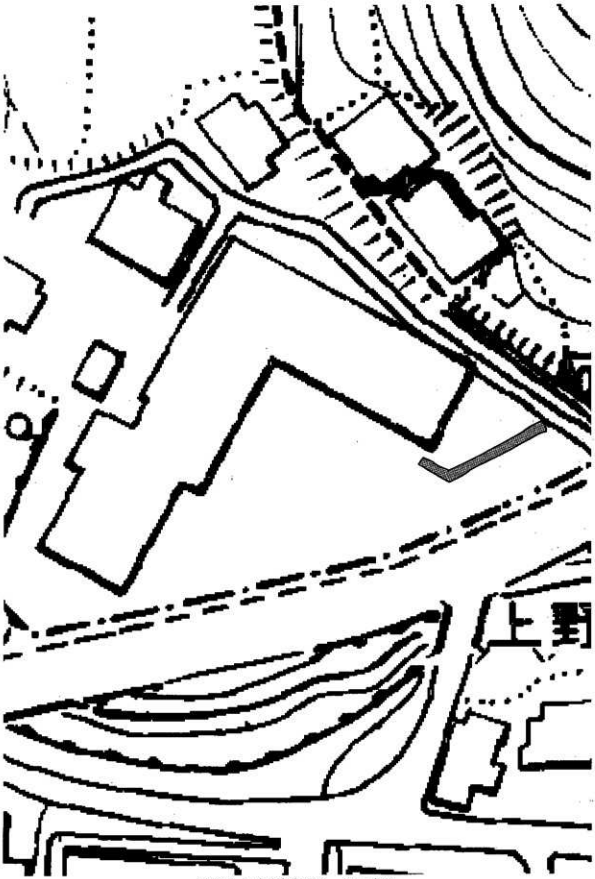
沢入口・沢頭・藤森遺跡は前沢川の上流の山麓に展開している。沢入口遺跡では住居址５基が出土しており、いずれも須恵器の出土がほとんどなく、土師器、灰釉陶器が中心であることから、平安時代中期から後期にかけての集落址と考えることができる。その他縄文時代後期と考えられる土器片も出土している。沢頭遺跡からは、平安時代の住居址が１基出土している。この住居址からは退化した土師器坏や、黒色土器椀が出土しており、終末期に近い時期と考えられる。藤の森遺跡でも１基の住居址が出土している。この住居址からも器高の低くなった土師器や黒色土器、灰釉陶器が出土しており、沢頭遺跡と同様な時期と考えることができる。

平出上ノ原遺跡は、上記の３遺跡に続いて分布しており、調査の際、縄文時代中期の土器片が若干出土しているにすぎない。また、公家塚、大窪遺跡からも遺構は発見されていないものの、それぞれ縄文時代中期後葉、縄文時代中期から後期の土器片が出土している。

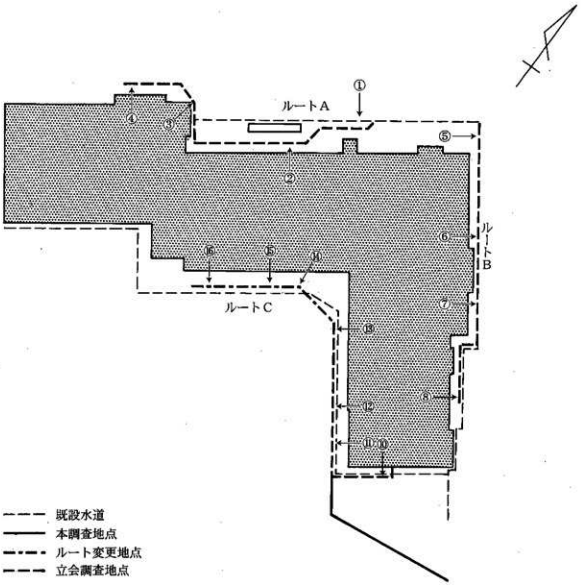
また小城遺跡では、石塔の建設に際して埋甕と考えられる縄文時代中期後葉の土器が１点出土している。



第2図　周辺遺跡分布図　S=1/2,500



第3図　調査地点位置図　　S=1/500



第4図　水道敷設ルートおよび調査方法区分図

第Ⅱ章　調査の経緯と経過

1. 保護協議の経過

平出保育園の下水道敷設工事は年度当初に計画がなかったが、８月に実施が決定され、設計管理者の選定および工事請負人の選定が行なわれた。町教育委員会のこども係に、当該地が埋蔵文化財包蔵地である旨を連絡したところ、設計が明確でないことから、詳細な協議ができないとの回答であった。このため詳細な設計が完了するまで協議は保留していた。

設計監理者が決定し、詳細設計図が完成した９月上旬に実施設計図を基に協議を行ない、当該遺跡が町内で数例しか出土例のない石棺墓や、縄文時代早期の土器片が出土していることから、開発面積が小さくても本調査が必要であることを説明した。しかし、調査費が当初予算に計上されていなかったことから、町理事者の決裁を仰ぎ、補正で対応することを確認し、調査を行なうこととなった。

なお、次章で述べるが、経費の節減という意味合いもあり、本調査の範囲を極力絞り、保育園建て替えの際に破壊されていると考えられる地点については、工事立会い調査とすることにした。

第Ⅲ章　発掘調査

1. 調査の方法

平出丸山遺跡は、昭和57年の発掘調査を実施しているため、開発地点の遺構の状況がある程度予想できた。このため、調査区域が狭いことも鑑みて、試掘調査を実施せずに本調査を行なうこととした。

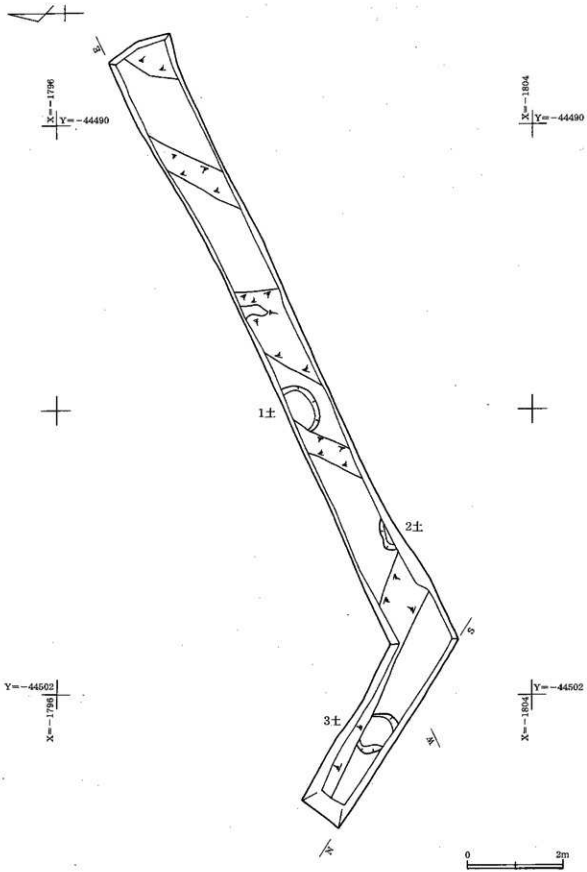
調査に先立って保育園建設時の設計図を基に、調査箇所の絞り込みを行なった（第４図）。保育園改築時の調査は、様々な制約から建物の基礎の内部で、破壊が懸念された地点について調査が行なわれたようである。しかし、工事写真を見ると、その他にも付帯工事を実施した折に掘削が行なわれているようであった。このため、新たに掘削がおよぶと考えられた約56mの区間の内、園舎前に敷設する32mについては上水道の埋設箇所に沿って下水道管を敷設するように施工することとし、正門付近については変更不可能と判断したため、本調査とした。また、そのほかの地点については破壊が進んでいると判断し、工事立会い調査を行なった。

調査では、遺構の検出は移植ゴテ等で実施し、遺構内の掘り下げも移植ゴテ等を用い、遺構を半割するなどして断面図の測量につとめた。遺構の掘り上がった時点で、1/20の縮尺を基本にして遺構平面図を作成した。なお、遺構の測量については、トータルステーションによる変化点の取り込み、および打ち出しを用いての現地で結線作業を実施した。

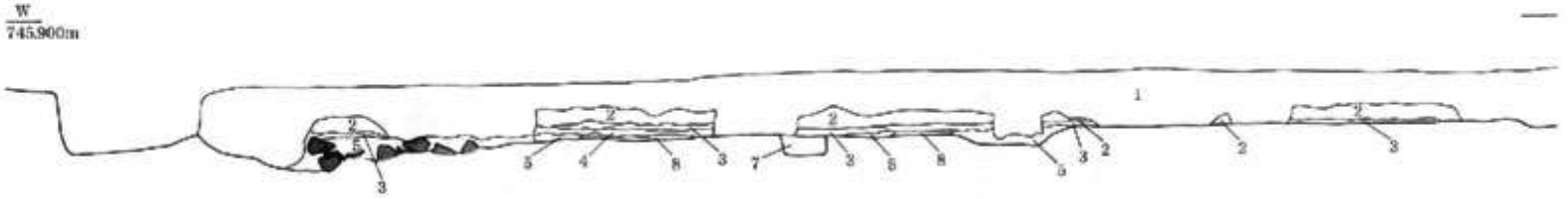
なお、調査区の設定は、国土交通省国土地理院の測量法による世界測地系・平面直角座標系第Ⅷ系を基点とし、基準メッシュ図の区画については国土基本図（1:50,000中縮尺地形図）の区画に準じた。基準標高については、GPS測量機を使用して設置された基準点から移動したベンチマーク（KBM 3:745.627m）を使用した。

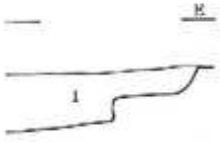
遺物の取り上げは、トータルステーションで出土地点を記録しながら取り上げ、遺物整理段階でグリッド番号を付した。遺構内の遺物については各遺構別に取り上げた。

遺物整理段階で遺物台帳を作成し、各遺物には出土遺跡名（略称：HMⅡ）と遺物番号、遺構名等を註記した。

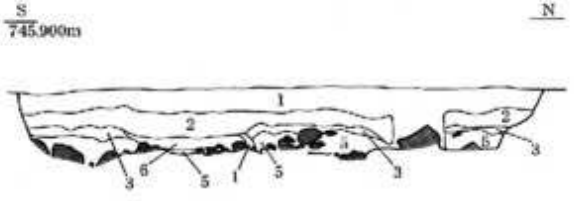


第５図　平出丸山遺跡第２次調査全体測量図　　S=1/80





1：耕土およびカクラン
2：水田耕作土
3：基盤層
4：黒褐色土
5：暗褐色土（黒色味をおび、礫多くまじる）
6：黄色土（埋土）
7：遺構覆土
8：地山



第6図　調査区土層断面図

第Ⅳ章　遺構と遺物

1. 土　　坑

(1) 縄文時代

第１号土坑

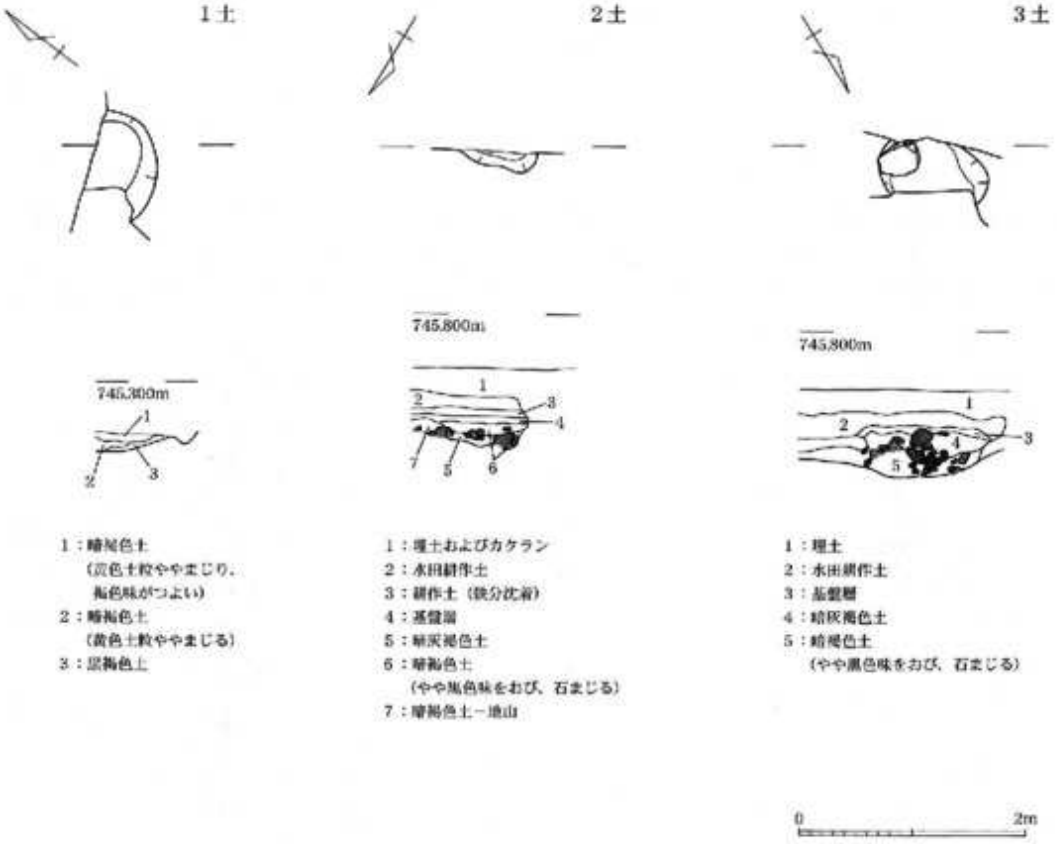
Kc08 20-4 Aa-2から出土した。南部は破壊され、北部は調査区域外となってしまったため、全体を調査することはできなかった。覆土は暗褐色系の土が中心であった。

第２号土坑

Kc08 20-4 By-0から出土した。北の一部のみの出土である。周辺は自然石が多量に出土していたため、遺構を正確に把握できず、西部の壁を掘りすぎてしまった。覆土中にも礫が多量に含まれていた。

第３号土坑

Kc08 20-3 By-48から出土した。南部は調査区域外となり、北部を上水道の敷設時に破壊されてしまっていた。この土坑も覆土中に多量の礫が含まれていた。



第７図　土坑実測図

2. 遺構外出土遺物

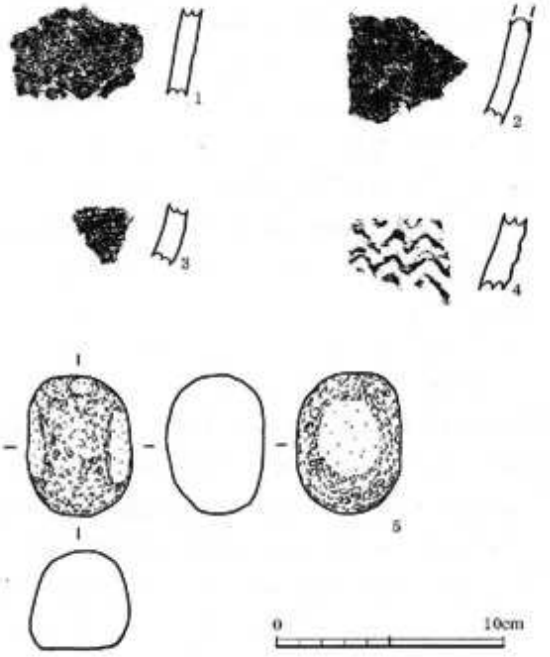
今回の調査では、遺構に伴うと考えられる遺物は出土していない。また、遺構外からも小片が少量出土したにすぎない。

1～3はKc08 20-3 By-49から出土した。1は無文で、外面にススの付着が見られる。2・3は縄文を施文した土器片である。2の縄文は全面ではなく、器面の一部に確認できる。4はルートC西部の立会い時に採集された土器片である。振幅の大きい山形の押型文である。

5は、Kc08 20-4 Ab-4から出土した。敲打痕が確認できる。

今回図示した以外に黒曜石の小片が8片出土している。

いずれの破片もカクランされている層位からの出土と考えてよさそうである。



第8図　出土遺物実測図

第V章　ま　と　め

平出丸山遺跡は保育園の建て替えの際、石棒等が採集され遺跡である事が判明したことから、発掘調査が行われた。当時は埋蔵文化財に対しての認識も甘く、文化庁を始め、長野県教育委員会、長野県考古学会といった各方面の方々のご尽力によって、記録保存を行う事ができた。今回はその後の遺存状況の検証という意味あいもあったのかもしれない。

第1次調査は時間的な制約もあってか、建物基礎内側の東部分の調査を行っている。今回の立ち会いでも明らかな様に、北東から南西にむかってゆるやかに下がっていく地形を切り盛りして水田を開削しており、遺跡西半部については盛土がなされ、園舎の建設時に遺構が破壊から逃れている可能性が高い。

今回調査を実施した南東部では、約20cmの盛土が確認され、その下層からは水田の耕作土が出土したことから、保育園建設当時は、水田を残す形で埋め土していることが判明した。しかし、昭和58年の改築時の水道管の敷設を始め、排水施設の埋設や、旧園舎の基礎の埋め立て等が確認され、遺構検出面はその多くが破壊されていた。今回園庭に新設した下水道工事の立ち会い調査地点では、第1次調査の際、石棺墓が出土した付近も含まれていたため、特にルートCでは設計上の上水道敷設地点に重なるように掘削を依頼した。

立ち会い調査の結果ルートAは東部の公共桝付近でおよそ1.2m、西部では約0.7mの掘削深度であった。このルートは、上水道、排水路および排水桝、ガス管の敷設によってほとんどの地点がカクランされていたものの、東部では黒色系の土が約1.2m堆積し、その下部にローム層が存在しているのが確認できた。中央部では、約1mの深さまで掘削が及んだが、地表下約40cmに水田の基盤層かと考えられる土層も一部みられたが、多くがカクランをうけていた。さらに東部は約0.7mの掘削で、そのすべてが埋土と考えられる土で

あった。なお掘削された土の中に微量ではあるが骨粉が確認された。

この様な状況から、東部から西部に向かって徐々に低くなる地形を、東部の高さを基準にして埋め土を行って整地している様子がうかがえる。

ルートBは、園舎と擁壁との間隔が狭く、その間に上水道および雨水の排水が埋設されている状況であった。このため、北部では約1.8mの掘削であったが、地表下約1.5mまでカクランがおよび、その直下はローム層であった。中央部では約80cmの掘削のうち、上部30cm程度がカクランされ、その下層はローム層であった。南部付近では0.7m程の掘削で、地表下約0.3mまでカクランをうけ、その下層はローム層であった。

ルートBの観察では、黒色系の土の堆積が南部にむかって徐々に薄くなり、ロームが高くなっている様子が確認できた。

ルートCは、西部はおよそ0.9mの掘削で、上水道管の上部に下水道管を敷設することになったことから、上水道敷設時のカクランの土層内にとどまった。また、中央の屈曲部付近では、約1mの掘削の内、地表下約50cmが埋土と考えられる層位であり、その下層に約0.4mの暗褐色系の土が観察され、ローム層に至る。南部では約1.2mの掘削深度で、上部0.2mが埋土と考えられる土の下層に暗褐色系の土が約0.2m観察され、ローム層に至っていた。なお、北西部の掘削土内から微量ではあるが、骨粉と考えられる物が出土した。

このルートをみると、やはり南部から北西部に向かってローム層が下がっており、総じて南東から北西にむかって高度を下げていく地形であったことが推測できた。

今回の本調査では、土坑が3基出土したが、調査範囲が狭小であったため、第2号土坑はごく一部の調査にとどまり、他の2基についてはカクランによって破壊が進み、遺物の出土もなかったことから、詳細なデータを得ることができなかった。

遺存した地山の状況をみると、上野川によって搬入された河床礫が集中して堆積しており、対岸で調査が行われた越道遺跡と状況が近似していた。しかし、礫層下部にローム層が確認できたことを考えると、越道遺跡よりは安定した地点と考えられる。

平出丸山遺跡では、縄文時代後期の石棺墓が、上部に集石を伴って検出されており、その下層には縄文時代早期の押型文も出土している。

今回の調査では、時期の確定できる遺物は、押型文（山形文）が1点出土しているのみであった。

越道遺跡では縄文時代早期の遺物は出土しておらず、当該期にこの遺跡が地形的に不安定であったことが考えられる。

縄文時代後期の墓域に関しては、今後平出丸山遺跡と越道遺跡から出土している遺物を、詳細に検討して考察していかなくてはならない問題と考えている。

未筆になりましたが、現場作業から報告書刊行までご協力を賜りました協力者の方々にお礼を申し上げます。

調査前風景

図版２

調査前状況

調査区全景

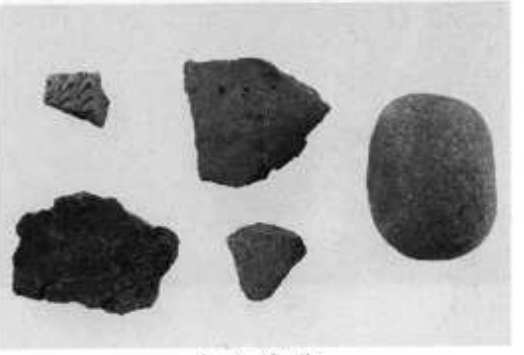
南北方向調査状況

東西方向調査状況

第1号土坑

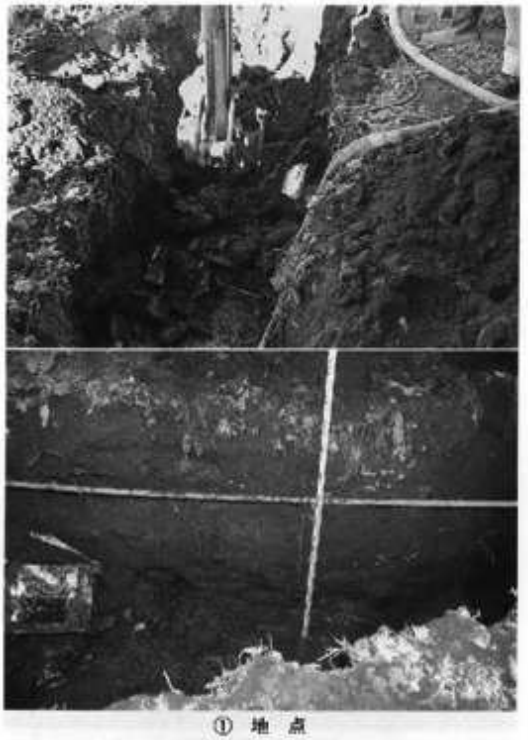
第2号土坑

第3号土坑



出土遺物

図版４



① 地 点

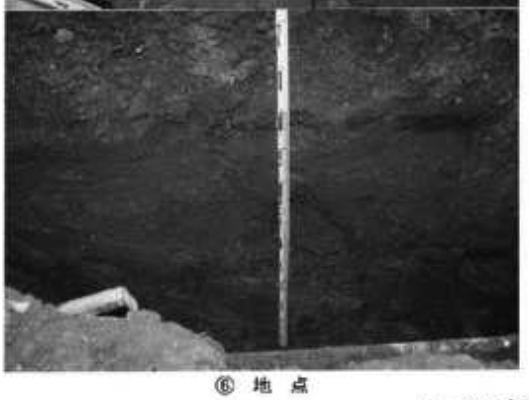
② 地 点

③ 地 点

④ 地 点

ルートＡ立会い調査状況

⑤ 地 点



⑥ 地 点

⑦ 地 点

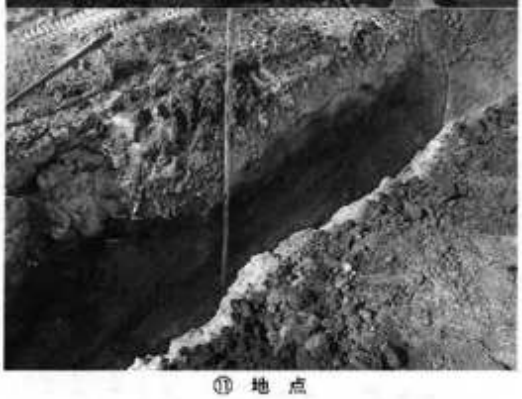
⑧ 地 点

ルートＢ立会い調査状況

図版6

⑩ 地 点

⑫ 地 点



⑪ 地 点

掘削時遠景

⑬ 地 点

ルートC立会い調査状況（1）

⑭ 地 点

⑮ 地 点

⑯ 地 点

掘削状況

ルートC立会い調査状況（2）

報告書抄録

ふりがな	ひらいでまるやまいせきに
書名	平出丸山遺跡Ⅱ
副書名	下水道敷設に伴う発掘調査報告書
著者名	福島 永
編集機関	辰野町教育委員会
所在地	〒399-0493 長野県上伊那郡辰野町中央1番地 電話（0266）41-1681
発行年月日	平成22（2010）年2月26日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地	コード		世界測地系		調査期間	調査面積
		市町村	遺跡番号	北緯	東経		
平出丸山遺跡（ひらいでまるやまいせき）	長野県上伊那郡辰野町大字平出2784番地	20382	150	35°58′58″	138°00′20″	20091007～20091025	約12㎡

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
平出丸山遺跡	墓域	縄文時代	土坑 3	縄文時代早期土器 縄文時代土器・石器

特記事項	保育園建て替え時の付帯工事によって園舎周辺では掘削が広範囲に及んでいた。今回の調査ではカクランされた地点を調査した結果となったが、北西部に厚く埋め土された様子が確認されたことから、この地点では遺構の残存している可能性は高いと推定される。

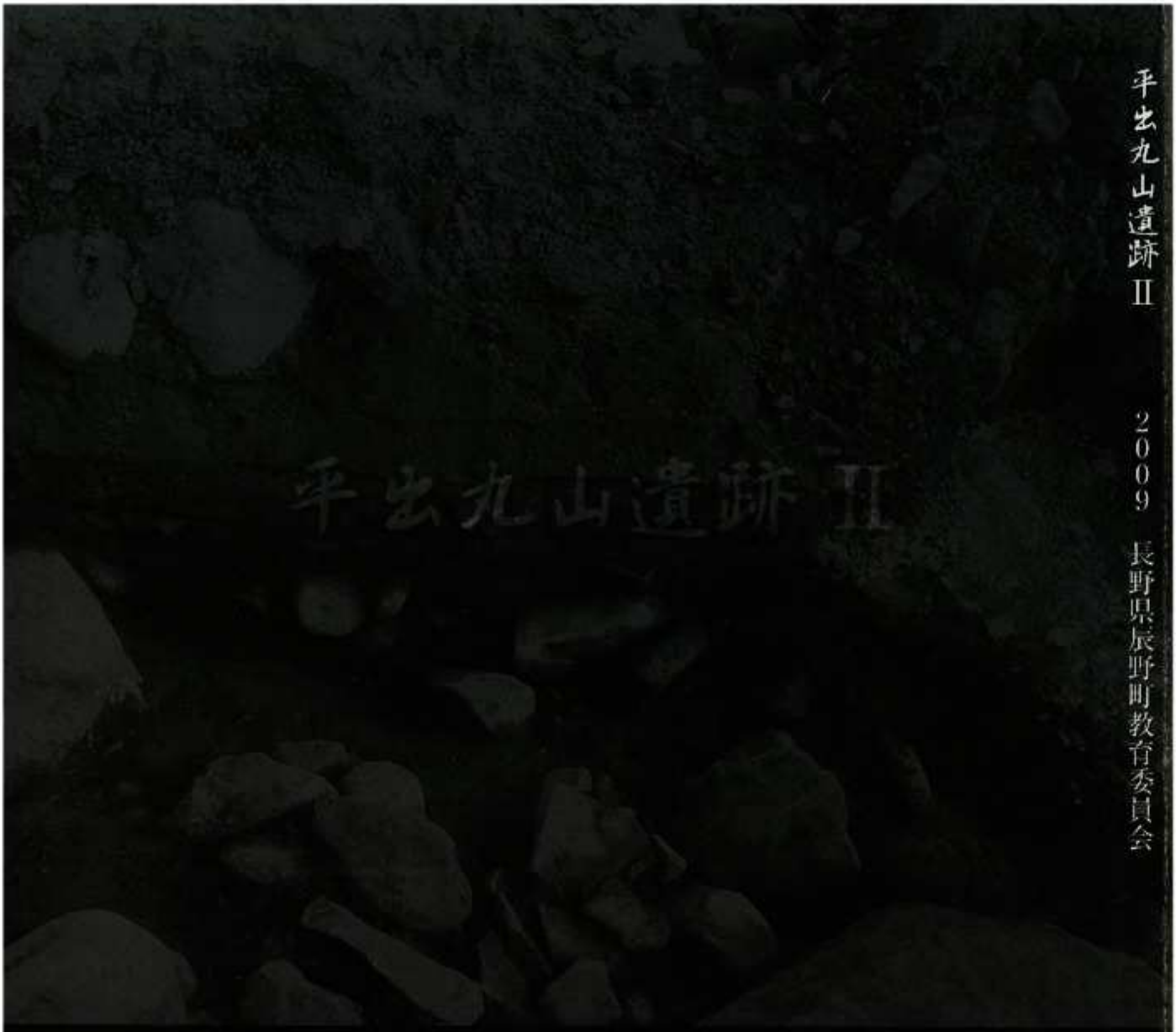
平出丸山遺跡 Ⅱ

－下水道敷設に伴う発掘調査報告書－

発行日　平成22年2月26日

編集・発行　辰野町教育委員会
長野県上伊那郡辰野町中央1番地

印刷・製本　上島印刷



平出丸山遺跡 II

2009

長野県辰野町教育委員会

HIRAIDEMARU